

朴の咲く頃

堀辰雄

青空文庫

あたりはしいんとしていて、ときおり谷のもつと奥から山椒さんしよのうくいかすかな啼なき声が絶え絶えに聞えて来るばかりだった。そんな谷あいの山かげに、他の雑木ましに雑まじつて、何んの木だか、目立つて大きな葉を簇むらがらせた一本の丈たけたか高い木が、その枝ごとに、白く赫かがやかしい花を一輪々々ぽっかりと咲かせていた。……

それは今年ことしの夏になろうとする頃で、私と妻は、この村にはじめて来た画家の深沢さんを案内しながら、近所の林のなかを歩き廻あづくった拳句、その林の奥深くにある大きな樅もみの木かげの別荘（そ

こで私達はおとし結婚したばかりのとき半年ほど暮らしていたのだった……の前を通つて、そのもつと奥にある村の水源地まで上つて行つたときのことであつた。その村を一目に見下ろすこととの出来る頂上で少し遊んだ後、こんどはすぐ裏側の谷へ抜け、殆ど水が涸れて河床の露出した谷川に沿いながら、村の方へ下りて来た。雑木林はなかなか尽きそうで尽きなかつた。漸くその雑木林の中に見おぼえのある一軒の別荘が見え出した。私達は去年の落葉の溜たまつたその張出縁を借りて一休みして行くことにした。女の画家らしく草花などを描くことの好きな深沢さんは、ひとり離れて縁先に腰を下ろしながら、道ばたで写生して来たさまざまのまな花の絵に軽く絵具をなすつていたがそれを一とおりますすと、

絵具函えのぐばこを脇わきに置いて、気軽にひよいと仰向けにそこへ寝そべろうとした。と、急に起上つて、「あら、あんな真白な花が咲いている。」そう頭上を指さしながら、もとのように腰をかけなおして、まぶしそうにそつちの方を見上げた。「いい花だなあ。ちよつと泰山たいさんぼく木みみたいだけれど……」

私も妻も立ち上つて行つて、一しよにそれを見上げた。妻がいった。「泰山木にしては葉がすこし……。」

そう言われて、私は漸つと他の櫛ならや櫛はげの木の葉なんぞのよりも、目立って大きい若葉を見て、一目でそれが朴ほおの木の葉であることを思い出した。でも私は、

「朴の木ではないかな?……」と、まだ半信半疑で言った。私も

その木がこうやって花咲いているのを見かけるのは今がはじめてだからである。……

三四年前、まだ私もいまのように結婚せず、この村で一年の半分以上を一人でぶらぶら暮らしていた時分、十月も末になると村じゅうどの木もどの木も落葉し出して、それから数日のうちに大抵の木が落葉し尽す——そんな落葉の一ぱいに溜たまった山かげを私は好んで歩きまわったが、そういう折に私はそれ等の落葉らに雑まじった図抜けて大きな枯葉をうっかりと踏んづけたりしてそれの立たてる乾かわいた音に非常にさびしい思いをしたものだった。それは私自身だつてかなりさびしい思いを持つてはいた。けれども、そんな大きな枯葉の目に立つほど溜たまっているような谷あいそのものも、

なかなかさびしい場所であった。それが朴と云う木の葉であることを私は誰にともなく聞いて知るようになっていた。が、その朴の木にどんな花が咲くのかその頃の私は全然考えてもみなかった。——それが、いま見ると、夏の来るごとにいつもこんなに匂においの高い花を咲かせていたものと見える。

「矢つ張、朴の花ですね。」そう私はこんどは確信をもつて言えた。

「朴の花ですか？」深沢さんは鸚鵡おうむがえ返しに答えて、それからもう一ぺんその花を見上げながら言った。「いい花だなあ。」

私も妻もそれに釣られて、再び一しよにその真白い花をしみじみと見上げているうちに、私は不意とこの村のここかしこの谷あ

いに、このような花をいまぽっかりと咲かせているにちがいない、
 幾つもの朴の木の上立っているさびしい場所を、今だつて自分はひ
 とつひとつ思い出していくことが出来そうな気がした。——そう
 思つて、私はその頃自分の孤独をいたわるようにしながら一人歩
 きをしていたあの谷、この谷と思いをさまよわせているうちに、
 急に私は何かに突きあつたかのように、ついその谷の奥で山^さ
 椒^{んしょうくゐ}喰^いのかすかに啼^ないているのを耳に捉^{とら}えた。が、それは二こ
 え三こえ啼いたきりで、それきり啼^やき止^やんでしまった。

気がつくと、私の傍で妻もその小鳥の啼くのを一しよに聴^きいて
 いたと見え、それがそのまま啼き止んでしまうと、私の方へ顔を
 上げながら、

「ああ、もう啼かなくなった」と何気なさそうにいった。なんでもないことなのに、私はそれに気がつくとか何かしらはつとした。

深沢さんは、又ひとりでスケッチブックをとり出して、縁先に腰かけたまま、その花さいた朴の木を見上げ見上げ写生していた。

二

午後から、深沢さんが一人で雑木林に写生に行っている間、私は妻と一緒に宿の主の不二男あるじさんの案内で、今年借りることにした近所の林の中にある家を見に出掛けた。

その小さな家は昔から私も知っていた。夏になると入口の棚たなに

赤だの白だのの豆の花が咲いて、その下を潜くぐりながら、毎年違つた人達——或年あるには外人の一家もいたことがある——が出たり入ったりしているのがちよつと好もしい眺ながめだった。それは外にも大きな別荘を持つていた日ひゆうが向さんという未亡人の持物で、冬の間別荘番に住まわせるために建ててあつたのだが、夏場だけ人に借していたのである。

実は去年も私達はそれを借りかけて、矢つ張宿あるじの主の不二男さんと一緒にそれを見に行つたことがあつた。

「夏になると、これに豆の花が咲いてなかなか好くなるよ。」そのとき私は妻にそんな説明をしながらその家の入口を指し示した。「『道のべは人の家に入り豆の花』——これは犀さいせい星先生の句だ

がね。ちよつとそんな感じだ。」

が、はじめてその家のなかへはいつて見て、案外方々が傷んで
いるのに驚いた。その上、家のすぐ裏のわずかな空地にもつてき
て、外からは見えなかったが、納屋なやのようなものが立っていて、
家全体がいかにも暗ぼつた感じがあるので、「あれは何なの？」
ときいてみると、「それはいずれ取壊とりこわそうと思つていますが：
…」と不二男さんは言つて、その小屋には日向さんの爺じいやがしば
らく仮住みしていたが、その前年の冬にそこで死んで行つたこと
を包まずに話した。

「この家、傷んでるだけ位ならいいんだけど、あんなもの
があつては」……妻はそう私にそつと耳打ちしたが、それには私

も同感だった。若しかすると昔ちよいちよい見かけたことのある
 その死んだ爺やの顔——目つきのこわい、いんごう因業いんごうそんな爺やの顔
 がふいとその瞬間鮮かに浮んで来ただけ、その閉された小屋は妻
 がそれをうす気味悪がった以上に、私自身の心に暗い影を与えて
 いるにちがいがなかった。

そんな事で、去年はその家を借りるのを見あわせ、もう一方の、
 同じ林の中にあつた、もつと小さな、もつときたない家で間に合
 わせた。

が、今年はその爺やの小屋も取壊したし、いろいろ手を入れた
 ので幾らかさっぱりしたから、どうですかあれをお借りになつて
 は、と不二男さんもすすめるので、私は性懲りもなくもう一遍そ

の豆の花の咲く小家を借りようかと思ひ立つて、再びそれを見に来たわけだった。――

その小家が急に若葉の中から私達に見え出して来たとき、何んだかすつかり様子が違っているのですぐにはそれと気づかなかつた位であつた。おやと思つて、私はおもわずその場に足を駐とめた。「あ、あの豆の棚をとつてしまつたの？」私はひどくびつくりしたように叫んだ。

「ええ、あれはあのままですと、どうもこちらの三さいくさ枝さんのお家へあまり真向まむきになるので……」不二男さんはいかにも何んでもなさそうに説明した。「ちよつと斜めに道をつけてみましたか……」

「それは惜しいことをしちやつたなあ。」私はこんどはがっかりしたように言った。

そうして不二男さんと妻とがずんずんその新しい小径こみちから中へはいつて行つてしまつてからも、私はなお暫しばらくその入口に一人残つたまま、お隣りの三枝さんの別荘の、数本の松の木にちよつと一もと芒すすきをあしらつただけの、生籬いけがきもなんにもない、瀟洒しょうしゃな庭を少し恨めしそうに見やりながら、いつまでも秦皮とねりこのステツキで砂を掘じつていた。

まあそれも仕方がなかろうと思つて、漸つとみんなの跡からはいつて行つて見ると、もう先きに不二男さんのところに古くからいる爺やが来ていて雨戸などをすつかり明けておいてくれた。裏

の小屋も跡かたもなく取払われ、家のなかは去年から見ると見ちがえるように小ぎつぱりとなっていた。大体、それを借りる事にし、そうしていろいろ足りない台所道具などを調べてから、みんなで家を締めて出て来たときは、まあ豆の棚ぐらいはどうでも好いやという位には私も満足していた。

「ちよつと三^{さいぐさ}枝さんのヴェランダをお借りして、一休みして参りましょう。」

そこも管理している不二男さんがそう言いながら、先きに立つてずんずん松の木の庭のなかへはいつて行くので、私達も構わずについて行った。そうして不二男さんが爺やに何か言いつけながらその別荘のまわりを一まわりしている間、私達は若葉の齒^{しだ}朶で

縁どられたヴェランダに腰を下ろして、真向かいのわが家の方を見やっていた。やがて無口なおとなしい爺やが鍵束かぎたばをじやらつかせながら帰って行き、不二男さんだけが私達の傍に寄って来るのを見ると、

「なるほどあそこに豆棚の入口があつたんじや、こつちへ真ん向きだね」と私は口をきいた。

「どうもあのままですと、一々出はいりするたんびに、こちらと顔を合わせなければならぬので、お互にお厭いやでしょうと思つて、ああ入口を変えてみたんですが。……しかし、もともとウインさんのいらした頃は、こちらのヴェランダが向うを向いていましたね……」と不二男さんは今しがた爺やの出て行った南側を指さ

した。

「そうだったね、散歩のついでによくこの前を通りかかると、感じのいいおじいさんとおばあさんがいつも二人でヴェランダに出て本を読み合っていたっけなあ。」私も合あいづち槌を打った。「何しろここも古い別荘だ。」

「この村ではこの辺が一番最初に別荘地としてひらけたものでしてね、その時分は建てた順に別荘番号をつけていましたが、このウインさんの家なんぞは何んでも四号か五号でした。——三さいぐ枝ささんの奥さんがこの家をお買いになるといわれたとき、あんまり古い家なのでどうかと思いましたが、すっかりこうして手を入れたら、見ちがえる程になってしまいましたね。前はひどい紅べ

殻にがら塗りの小屋でしたが……」

私はこの村を知ってからもう十年以上になるので、そんな一昔前に流行はやっていた紅殻塗りの小屋のことも、その頃の古い住人達のこととも少しは覚えていたが、おとし結婚後はじめてこの村に来るようになった妻の方は全然その頃のことを知らないのです、そんな不二男さんの話にも珍らしそうに耳を借していた。

「日ひゆうが向さんのところはこの頃ずっと来ないの？」

「おとしひさしづりで奥さんがお嬢さんをお連れになって、ひと夏お見えになっていました。——が、その冬に爺やが死んで、そのときは甥おいごさんが見えられたつきり、それからはまだお見えになりません。」

「その死んだ爺やというのは僕も知っている爺やだろうけれど、おっかない爺やだったね。君んちの爺やとはずい分仲が悪かったんじやあない。何んでも一度、あっちの爺やの畑の南かぼちゃ瓜を君んちの爺やが何んとかしたとか云つて、どういふ行きがかりだったか、たいへん酔払つて室生さんちの門の前まで来て、中へはいらずにいつまでも悪態をついていた事もあつたね。」

「そんな事もありましたっけね。」不二男さんは少し苦笑いした。それから急に真顔になつて、

「私なんぞも、これまであの爺やは飲んだくれで、因業な奴だとおもつておりましたけれど、死んでからいろいろ話を聞いてみると、かわいそうな爺やでした。……」

そう前置きをして、不二男さんも私達の隣りに腰を下ろしながら、何か思い出ふかそうに話し出した。

三

「あなたなどは随分お古いから御存知でしょうが、この裏の通りにあつたあの水車ですね。——昔はあの裏通りのことをウオタアウイ水車ル・レエンの道なんぞと外人達がいっていましたが——あの水車というのは、元来日ひゆうが向さんの御主人がこしら拵えさせて、自分の別荘の方へ山水を引かせていたものなのですが、まあこの辺では昔からあれが唯一の水車でして、あの林の入口でごとんごとんと音を立てな

がら日ねもす廻っていた長閑な様子は何んとなく気持のいいものでした。ところが、その日向さんの御主人が七八年前に急にお亡くなりになった。著名な政治家でしたけれども、これがまたこの上もなく廉潔な方でしたので、殆ど財産らしいものは何んにもお残しにならなかつたものですから、たいへん奥さんたちはお困りになられたようで、その別荘もすぐ売りに出されました。最初は一万円位でというお話でした。それは地所も千二三百坪からありましたし、場所も申分はないのですが、何しろ家は古いし、景気も悪かつた時分ですから、なかなか買手がつきませんでね。——それに奥さんも割合に暢気な^{のんき}お方なので、いくらお困りになられていてもそれで買手が無ければしようがないといった風で、その

話はそのままになすつて、それからまた引続き二三年の間夏になると唯一人のお嬢さんをお連れになつてはいらしつておりました。お嬢さんももう十七八におなりになつていましたが、テニスがお好きで、昔と変わらずに同じ年頃のお友達を集めては、庭の一隅にあつたテニスコートで愉快そうに球を打ち合つていらつしやるのが、往来からもダリヤやフランス菊などの咲き乱れた間に垣間見えしました。それから少し歩いて行つて、こんどは林の入口に、あの亡くなられた御主人のお好きだった例の水車が、もう半分朽ちかけたまま、それでもまだどうにかこうにか廻転しながら昔のおもかげの梯をとどめているのを目に入れますと、私なんぞでもああお気の毒だと何んということもなしに思ったものでした。

「爺や夫婦は旦那様が亡くなってからも、もどおりに奥様のために働いていました。あなた達のこんどお借りになった家は、もと、その爺や夫婦に冬住まわせるようにお建てになったもので、夏だけ人に借し、その間爺やたちは日向さんの方で寝起きしていたのです。その時分から爺やはまめにその家のまわりの空地に豆だの胡瓜きゅうりだの葱ねぎだのの畑を作っていました。みんな御主人に召し上っていたために丹誠たんせいしたのだからといって、その家を借りた人にもつい鼻先にある畑のものには一切手を出させませんでした。そんな事を知らずに、その人達が自分の畑のような気になって勝手に葱なぞをとったりしていた事が分かるものなから、爺やは恐ろしい権幕で吠鳴りどなこんだりしたものでした。日向

さんの奥さんは葱一本ぐらいのことで、その方たちに申^{もうし}訣^わけがないと一人で気を揉^もんでおいででしたが、別に爺やを叱^{しか}ることもせずそのままにして置かれたようでした。どうせこんな山村のことですから、どこの爺やも難物ぞろいでしたが、まあ日向さんの爺やといえ、その中での難物でした。

「そんな風に、奥さんの方でも御主人の亡くなられた跡はともすると爺やに一^{いち}目^{もく}置いて見えていたからでもあったのでしよう。は爺やにやるものを殆どやらずにいたからでもあったのでしよう。その代りに、いま売りに出している別荘が売れたら、少しは纏^{まと}つた金を分けてやるような約束をしておいたらいいのです。ところが漸^あつとその別荘が売れた。五年前のことです。買手は関西の或^{ある}

実業家で、仲に立った奥さんの甥おいを相手にさんざん値切つて、それを五千円で買いとつた。前から見ると無茶な値ですが、よほど奥さんの方もお困りになって来られたものと見えて、それをとうとうそんな値でお手放しになってしまわれた。そのときはその甥ごさんが一切とり仕切つて、こちらへもお見えになりましたが、なにしろ予想外の値にしかならなかつたので、その甥が爺やたちによく言つて聞かせて、約束の金どころか、殆ど一文もおやりにならなかつたようでした。そのときは爺やも奥さんの立場に同情して何んとも苦情を云わずに、その後も昔と変わらずに留守を預つておりました。

「が、それ以来、爺やたちは全然収入の目あても無くなつた訣わけで

すから、何んで食っているのか、私どもにはさっぱり見当もつきませんでした。それは丁度いま時分のような夏になろうとする頃で、一方では日向さんの別荘を買いとるや、すぐ新しい普請をしだして、どんどん元の古い家は取り壊しはじめていました。爺やたちの住んでいた小家の方は、そのとき一しよにお売りにならなかつたので、昔のまま日向さんの所有になっていました。夏は借り手は私どもの世話でもう去年の秋からきまつていたので爺やたちはどうする気だろうと思つていますと、或日、爺やたちは取り壊した別荘の古材木や古ブリキなどを少し分けて貰つて来て、裏の五坪ほどあつた空地へもつてきて、自分たちの手で掘立小屋のようなものを建て出しました。何んでも出来る器用な爺や

でしたから、何もかも一人でやって、夏の来る前までにはともかくも其^{そこ}処にじいさんばあさん差し向いで暮らせるようなものが出
来上りました。

「その夏、その小家は入口の棚に豆の花を相変らず美しく咲かせ
ました。その年の借り手は珍らしく若い外人夫婦で、五つ位の、
金髪に大きなりボンを結んだ可愛らしい女の子がいました。主人
の方は横浜の商会に勤めていて、土曜の夕方になるとやって来て
は、また月曜の朝早く帰って行くという風で、小綺麗^{こぎれい}な若い妻君
がその小さなお嬢さんを相手に物静かに暮らしていました。

「最初のうちは、その裏の掘立小屋に引つ込んだ爺やたちもごく
おとなしく暮らしていたようです。が、人一倍強情な爺やの方は

ともかくも、婆さんの方はよくそれまで辛抱したのですが、それは女の料簡りょうけんですから、たまには愚痴の一つも出るでしょう。そうすると爺やは大へんに慍おこります。そのうちそれがだんだん夫婦喧嘩げんかになってきて、夏の半ばも過ぎた時分には、つい隣りの外人の家族たちにも手にとるように聞えるようになる、——何しろ、ふだんからむつつりとして、こわいような爺やのことですから、すつかりその若い外人の妻君が怖気おしけづいてしまつて、九月一ぱいという約束でしたのが八月の末になるかならないうちに、其処を引き上げて行つてしまいました。……

「九月になつて間もない或る朝、丁度こちらの三枝さんの奥さんが此処ここのヴェランダに出て新聞を見ていますと、きたない風呂敷ふろしき

包を肩にぶらさげ、蝙蝠傘こうもりがさを手にした婆さんがきよときよとしながら庭先へはいつて来るので、また物売りかと思つて見ると、それはお向いのお婆さんでした。とうとう辛抱しきれずに爺やと別れて、自分だけはこれから横川よこがわの在まで自分の先夫の娘を頼たよつて行くのだと言います。こちらの三枝さんの奥さんは、日向さんの奥さんとは昔馴染むかしなじみ染ぬめたので、婆さんは出しなにちよつといとま乞ごいに立寄つたのでした。

「三枝さんはそれまでのいろいろの事情をよく御存じのお方でしたので、その婆さんのことも気の毒に思われて、『あなたはとうとう行つておしまいになるんですか。もうすこしじつとしていらつしやればいいのに……』』といたわるように言われました。

「そう言われると、婆さんはつい日頃の愚痴が出て、いまさらの
 ように日向家の仕打ちから、自分から見れば爺さんは呆れ返るほ
 どのお人好しなのに、この村では誰一人にもそれが分からず、こ
 んな折にも相談相手になつて貰えるもののない事から、その挙句
 この村中の誰れかれの悪口を言い出すものですから、しまいには
 三枝さんの奥さんも持て余してしまつて、いくらかのを包ん
 でやつて早く帰らせようと思いました。婆さんは何度もお礼をいっ
 てそれを受取りましたが、すぐには立去らずに、こんどはこれか
 ら頼つて行こうとする横川在の先夫の娘のことを何かと話し出し
 て、いまはそれが百姓家に嫁いでいて、かなり裕福に暮らし、こ
 れまでも折々に自分が訪ねていくと『おばあさんだけならいつで

も引きとるから来なさるといい』と言つて、歸りがけには必ず米や野菜などを一人ではとても持てないほど持たせてよこす事などをくどくどと繰り返していました。……

「そんな事があつてから、一日おいて、三日目の朝、また三枝さんがいつものように一人でヴェランダで新聞を読んでいますと、何か向いの庭の中で聞きなれない人々の声にまじ雑つて爺やのしやがれた声が聞えてくるので、どうしたのだらうと思つていました。そのうち爺やが二三人の見なれない男たちに指図さしずしながら、こちらの植木を引っこ抜かせているのが見えて来ました。それと同時に、そこいらにはその春別荘の売れたとき爺やがちよつとしたかえで楓だとか、そのほか小さな植木だけをこちらに移し植えておいた、

それをいま植木屋を呼んで売り払おうとしているのだという事が
 分かりました。『お前は好い娘があるんだから其処へ行け、おれ
 一人でならどうとでもして暮らして見せるから』とこの頃爺やが
 何かというとなんな事ばかり言つたという、おとといの婆さんの
 話もふいと思ひ出されて、三枝さんの奥さんは、あんな氣強そう
 な爺やでもよく年をとつてからそうやつて一人で暮らす氣になれ
 るものだと思つて、そんな植木屋たちの仕事をいつまでも見てい
 ました。——何んでも、あとで聞きますと、そのとき売つた植木
 の代が二十何円とかになつたさうでした。まあそれだけあれば、
 こんな村では爺やひとりならその冬を結構越すぐらいの事は出
 来たでしょう。……」

不二男さんはここまでをほとんど一息に話しつつづけた。そうしてここで突然言葉をとぎらせた。そうしてそういう爺やの何処かさびしそうな姿を見ていたそのときの三枝さんのように向いの若葉のなかの家を暫く見^{しばら}やっていた。それからまた話しつつづけた。

四

「その冬はどうやらそれで越せたようですが、今年^{ことし}は爺さんどうするだろうと私どもも心配していました。夏場、またその家を人に借すにしても去年のような事でもあると、借りたお方にも気の毒だし、仲に立つ私どももたいへん迷惑しますので、ともかくも

日向さんの奥さんに手紙でその事を言つてやりました。すると奥さんも何かといろんな事が気がかりだったのでしよう、折返し今年の夏は自分達がそちらへ行くから誰にも貸さないで置いてくれという御返事がありました。

「夏になつて、また豆の花の咲く頃になると、日向さんの奥さんはお嬢さんと女中とを連れて、五年ぶりでこちらへお見えになりました。その五年の間にあの鷹おうよう揚な奥さんもどれほど御辛苦をなすつた事だろうと案じていましたが、お会いしてみると、肩のあたりに心もち窶やつれをお見せになつている位なもので、殆ど以前ほとんとはお変りになつていません。お嬢さんの方はもう二十を越されて、ますますお母様似になられて、年にしては少しふとり過ぎる

位にふとつて、豊かな感じのお嬢さんになっていられました。その方たちがふたりで住まわれるにはあの豆の花の咲いた家だけでは少々狭過ぎるほどの感じでした。爺やはまた裏の掘立小屋にひっ込んでしまいました。喧嘩相手の婆さんは居なくとも、今年何か張りがあるようで、しかし相変らず黙々として何かから何まで一人でやっていました。ひさしぶりに畑仕事にも精出している爺さんを相手にして、奥さんやお嬢さんのいかにも屈託なさそうな笑い声などが時ならず豆まめ棚だなの奥から起つたりして、その小家の何もかもが再びもとのように蘇よみがえつたようでした。

「なんでもその夏にはこんな出来事もありました。八月の半ばも過ぎてから、爺さんは自分の甥とかのいる田舎いなかへ鮎あゆを食べに行こ

うと、奥さんとお嬢さんをしきりに誘っていました。いまでは爺
 やの唯一の身よりのものらしいその甥に、自分の世話になつてい
 た立派な奥さんたちを一目見せておきたかつたのでしよう。そこ
 で或日、奥さん、お嬢さん、それに女中まで伴つて、四人で汽車
 により、小さな軽便に乗り換え、それからまた乗合に揺られて、
 その千曲川ちくまがわ上流の或小さな町まで行き着いてみると、あいにく
 な事には川が荒れていて、鮎が一向に釣れず、その日はさんざん
 な目に逢つて夕方帰つておいでになりました。そうして帰りしな
 に皆さんで私どもへお立寄りになつて行きましたが、お嬢さんは
 ずけずけと爺やに不平を言いつづけてばかりいました。

『爺やったらあんな田舎へつれて行くんですもの。みんな私のこ

とを毛唐けとうだとおもつて珍らしがって見んの。私は構わないけれど、ママがお気の毒で見えていられはしなかつたわ。……』

「しかし爺やは何を言われても、苦笑いにまぎらせながら、
豆めの煙管きせるをくわえたまま、ぼんやりと休んでいました。 鉈なたま

「八月末になると、そのお嬢さんだけ先きに女中を連れてお引き上げになつて行きましたが、奥さんはまだお残りになつていました。お向いの三枝さんのところでも、毎年の例で奥さんだけお一人お残りになつていらしたので、話し相手もあり、心丈夫でもあるので、爺やに飯を炊たいて貰たつたり風呂を焚たかせたりして、いかに気楽そうにしてお暮らしになっていました。

「ところが或日のこと、三枝さんの奥さんがもうそろそろ引き上

げる準備に、女中を相手に日あたりのいいヴェランダにふとんのカヴァや何かを干していると、向うのもう大かた花の無くなった豆棚から日向さんの奥さんが不意に姿を現わし、それを見ると、何か気がかりな様子でこちらへ近づいて来て、

『もうお引き上げなの？』と尋ねました。

『いいえ、まだもうすこし居たいと思っただけけれど……』
 そう三枝さんは答えました。

『いまのうちにぼつぼつと片しておかないと、雨でも降り出したらと思うものだから……』

『そうね。私の方もそろそろ帰ってやらないと圭子けいこも困っているらしいの』と日向さんも言って、それから急に声を低くして、

「だけど、実は困ってしまっているのよ。うちの爺やがなんだか体の具合が悪いようなの。この頃は胸が痛いって、お粥かゆばかり食べているのよ。熱もあるようなので、寝ていろって幾ら言っても言うことをきかないで、一日じゅう何かしらやっついては、夜など私の知らない間にこつそりとお酒なんぞ飲んでいるんでしよう。あんな事をしていて、どつと寝つきでもしたら、どうしたらいいのかしら。まあ私でもこちらに居る間は、何とか世話をしてやれるけれど、そう私だっていつまでも居られやしないのだから……」

「三枝さんはそういう話を聞きながらも、見たところふだんと変らずに爺やが何かと働いているのを見えますので、そう心配するほどのことはないのだろうと相手の気休めになるような事ばか

り言うど、日向さんもいつかそんな気になって行かれたものと見え
 ます。

「九月も末近くなると、先まず三枝さんがお引き上げになり、程ほど経
 て日向さんもうとうとう爺や一人をお残しになって東京へお帰りに
 なられました。

「十月、十一月と過ぎましたが、あとに残った爺やはどうしてい
 るのか、私どもにはさっぱり姿を見せないようになりました。う
 ちの爺やとは仲なかつたが違がいをしていきますので、爺やにきいても何も知
 らないようだし、少し体の具合が悪いようなことも奥さんが帰
 がけにちよつと話しておられたので、もしやと、気にはなってい
 ました。前から爺や同志で顔を合わせたがらないようなので、自

然三枝さんの別荘の見まわりだけは私が自分でするようにしていましたが、秋も深くなつてその時分になると、もうまわりの木々がすっかり落葉し尽し、木々の枝を透いてあちこちの釘づけくぎになつた別荘が露あらわに見えて来ますが、日向さんのところはいつも締まつていて、ひっそりとしています。

「爺やはこの頃は自分で建てた裏の掘立小屋に全く住みついてしまつたようでした。三枝さんのところを見まわる度たびに、よつぽどその裏の小屋へまわつて声でも掛けてやろうかと思うのですが、私なぞが寄つてやつたつて何しに来たというような無愛想な顔しか見せない爺やのこと故ゆえ、いつも何んだか気がすすまなくなつて、またこんどにでもしようと思つて途中から引つ返して来てしまふ

のが常でした。

「十二月になつて、雪が二三度降り、いよいよ冬ふゆごも籠りをしだした時分になつてから、うちの爺やがどうもこの頃うちを明けてばかりいるのに漸ようやつと気がつき出しました。爺やも変り者ですから、何かまた一人でこそそやつているなど思つて、少し気がかりな事もありましたので、或雪ぐもりの日、ふいとまた爺やが出掛けて行きましたので、私もあとをつけて行きました。冬になると、林もなにも裸になつて、何処どこもかもすっからかんと見透せるものですから、人に見つからないようにあとをつけて行くのは容易ではありません。が、爺やは何んにも気づかずに、お古の長靴で湿つた落葉を踏んで、林の中をずんずん歩いて行きます。おや三枝

さんの別荘へでも行くのかなと思つていますと、爺やはそこも素通りして、ずんずん日向さんの家へはいつて行つて、裏の方へまわつたらしくそのまま姿を消してしまいましたので、うちの爺やが日向の爺やのところを訪ねて行くなつて珍らしい事もあればあるもんだと、ちよつと怪訝けげんにおもいましたが、私はそのときはそれを見届けたきりで先きに歸つて来てしまいました。

「その晩、私は爺やを炬燵こたつの中へ呼んで、『珍らしいことをきいたが、爺やは何んだつてな、この頃日向の爺やのところへ入浸しになつてゐるそうじゃないか、どうしたんだい』と知らん顔をして訊きますと、爺やは神妙な顔をして、『病氣だもんで、わつしやちよつくら見舞つてやつてるだあ』と何んの事もなさそうに言

います。どんな塩梅あんばいだときいてみると、爺やの話ではよく分かりませんが、どうも胃癌いがんらしい。それにもう寝たつきりで、再起のぞみもないようでした。「おかしなもので、ふだんはあんなに仲の悪かったうちの爺やが、相手がそんな具合に病気になつてしまふと何かと一人で面倒を見てやつていたのです。そんな昔の喧嘩相手の世話になりきつている向うの爺やも爺やです。しかし冬になると一人の医者もない村のことですから、私どももそれを引きいても、そのままにして置くより外には手の尽し方もなくなつていました。

「私は日向さんの方へも早速お知らせだけはしておきましたが、奥さんからは到底自分に行けそうもないから何分よろしく頼むと

言つて寄りこされたきりでした。そうしてその年も暮れちかくなつた或日、雪に埋つた掘立小屋のなかでとうとう爺やは全く一人つきりで死んで行きました。

「日向さんの方からは、奥さんの代りにいつかの甥ごさんが見えられて、葬儀万端の事をなさいました。横川在の婆さんの方からは、とうとう誰も見えませんでした。」

そこで漸つと不二男さんは爺やの死を語り終つた。気がついて見ると、いつの間にか日が陰かげつて、私達がそれまですつかり話に氣をとられて腰かけたままであつたヴェランダの上は、何か急に寒さむむ々として来た。

「それはそうと日向さんのあとに来た人っていうのは一たいどん

な人なの？」私は急に気もちを変えるようにそう言うと、妻にその三枝さんと背中合せになった隣りの宏こう壯そうな別荘を示しながら、「ほらあの通りだから。まるで場ちがいの化物屋敷みたいだ。：

…」

其そこ処こには、実際この村の四囲とは恐ろしく不釣合な、全部石づくりの、高い建物が、まるで幻のように、何か陰気な感じさえして、木と木の間から見え隠れしているのだった。

「ほんとに変な家なこと。」妻もそれをすこし眉まゆをひそめるようにして見ながら、言った。

「あそこにその日向さんのお家があつたの？」

「そうです」と不二男さんがそれを引きとって言った。

「あれは日向さんの別荘とその隣りにあつた矢つ張^{べにがら}紅殻塗りの古い外人別荘の二軒並んでいたのを買いとつて、それを一つ敷地にしてあんなものを建てたのです。ひと夏、その主^{あるじ}というのが、若いお妾^{めかけ}さんを連れて来ていましたが、その頃はまだ道ばたに立ち腐れになつたまま、昔を知つた人達になつかしがられていた例の水車を自分の家のなかへ移させたり、こちらの三枝さんの地所へまで目をつけて、それを欲^ほしがつて何度も周旋人を寄こしたりして、奥さんを大へんお慍^{おこ}らせになつた事もありました。ところが、その翌年、その主人というのが急に死んでしまつたのです。それからとはときどきその若い息子^{むすこ}さん達がお見えになるつきりなのです。……」

「そうなのかい、どうりであの家はいつも厭にひっそりしている
 と思った。」私はそんな自分の虫の好かない住人達のことよりも、
 その人達のために取払われた水車の跡が、いまは南瓜の畑かなん
 かになって、其処にはただ三四尺の小さな流がもとのままに潺せんせ
 々んたるせせらぎの音を立てているだけなのに自分勝手な思いを
 馳はせていた。

「しかしその若い息子さん達には、こんな山の避暑地なぞ面白く
 もないと見えて、八月頃、いつも突然真夜中なんぞにお友達を大
 ぜい連れて自動車で乗りつけ、一週間ばかり騒いで暮らして、そ
 れからまた嵐あらしのように帰って行っておしまいです。そうしてあと
 にはまだこの土地に馴染なじみのない他所よそもの別荘番が残って、村人か

らも忘れられたように、ひっそりと暮らしているきりです。……」

五

その晩、私達は宿の二階の部屋に寝転びながら、深沢さんが夕方描き上げて来た雑木林の絵を前にして、いろんなこの村の話をしあっていたが、きよう宿の主に聞いた爺やの話も出た。

「こういう山の村なんぞに流れ込んで来ている爺やなんというものは、それまでは何処どこで何を渡世どせにしていたのかも分からん奴やつが多いんだそうですよ」と私は言い畢おえた。「その孤独になつて死んだ爺やだつて、それから此処ここんちのおとなしそうな爺やだつて、

この村へ渡つて来るまでは何をしていたか誰も知らない。——そういう氣心の知れないような他所者よそものが多いから、村の人達だつてあまり附き合いたがらないし、自然何処の別荘番も冬なんぞになるとわれわれの考えもつかないような孤独な暮らしをしているらしいな。そういう奴がみんないまの話の爺やみたいに、何処の誰ということもなしに死んで行くんだと思うと、ちよつと堪たまらない氣がしますね。……」

蒙古もうこでいつ完成するともつかない仕事をしている同じ画家の夫を持つて、長い孤独な生活をしている深沢さんは、私の話を聞きながら、何度となく大きな目をみひらいては、深くうなずいてた。

夜はまだかなり寒かった。その晩はみんな早くから床にはいることにした。

深沢さんと妻とが床を並べて寝た隣りの部屋からはやがて二人の寝息らしいものが聞えて来たが、私ひとりだけはどうしてだかなかなか寝つかれなかった。

言ってみれば、いまの自分と全くかかわりのないような人たちの運命の浮沈が、それが自分には何んのかかわりもない故に、ゆえ反かえって切ないほどはつきりと胸に浮んで来て、いかんともしがたかった。それにまた、爺やも水車も豆の花の棚たなも何もかも自分のよく知っていたものがこの村からもだんだん絶えてゆくような思いすら誘われて、私の心の動揺はいつまでもやみそうもなかった。

遠くの谷で夜鷹よたかが不気味にギョギョギョと行って啼なき出した。

これあ溜たまらないと思つて一しよう懸命に目をつぶつているうち、私は突然、おとし結婚するとすぐまだ夏になるかならないうちにこの村へ越して来てしまつて、きようその前を通つてみた、水源地に近いあの樅もみの木かげの山小屋で二人きりで暮らし出していた時分、よく夜なかにその夜鷹の啼き声をきいては互に気味悪がつつていたことなぞを思い出した。丁度、その小屋の裏がすぐ木立の深い谷になつていて、夜なかになると夜鷹がその谷から谷へと大きな環わを描きながら飛びめぐつてゐるらしいのが、その不気味な啼き声あるいの或は遠のいたり或は近づいて来たりする具合で手にとるように私達には分かつた。けさ深沢さんと一緒にその山小屋を

見てから更に奥の方へ下って行つた谷がそれだ。その谷の奥で、いまもその夜鷹が啼き出しているらしかった。私はなかなか寝つかれないまま、けさ歩きまわっていたその谷じゆうに自分の持つて行き場所のない想いをさまよわせていたが、そのうちにふいにそれが一つのものに落着いたように、その谷かげで見つけた朴ほおの木の花が急に鮮かに浮んで来た。私はおもわず何かほつとしながら、その真白い、いい匂においのする花でもって自分のどうにもならない心をすっかり占めさせて行つた。

青空文庫情報

底本：「幼年時代・晩夏」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年8月5日発行

1970（昭和45）年1月30日16刷改版

1987（昭和62）年9月15日38刷

初出：「文藝春秋」

1941（昭和16）年1月号

初収単行本：「晩夏」甲鳥書林

1941（昭和16）年9月20日

※初出情報は、「堀辰雄全集第2巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年8月30日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

朴の咲く頃

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>